

# 『石丸繁子書道展』 作品目録

平成28年11月20日（日）～11月26日（土） 松山市立子規記念博物館特別展示室

**タイトル** : 『子規の声』－「俳句も書も同一の標準である」

**コンセプト** : 子規は明治28年秋、無事、帰庵した。今展は、その子規にスポットをあてた。

「いよいよ自立の心つよくなれり・・・ 文学はやうやう佳境にいりぬ」とあるように、病臥の身にあっても俳句の指導書「俳諧大要」の執筆を終えるなど、革新の日々はますます盛んであった。

句の選択は、感動からくる。作品は、その句の背景を深く識ることからスタートする。それを識れば識るほど美を発見し、紙面分割につながってくる。ある時、「俳句も書も同一の標準である」という子規の声が聞えて来た。その応援メッセージは、私の心と表現力を高揚させる源となった。私の俳句書は、まだまだ子規の志に魅せられとどまるところを知らない。

## 子規の帰庵

行く秋を生きて歸りし都哉	明治28年	季語「暮秋」	季節「秋」
稲の秋命拾ふて戻りけり	明治28年	季語「稻」	季節「秋」
面白う黄菊白菊咲きやたな	明治28年	季語「菊」	季節「秋」
繪かきには見せじよ庵の作り菊	明治28年	季節「菊」	季節「秋」

## 子規庵の年末

手凍えて筆動かず夜や更けぬらん	明治28年	季語「凍」	季節「冬」
霜やけや娘の指のおそろしき	明治28年	季語「霜やけ」	季節「冬」
煤拂や神も佛も草の上	明治28年	季語「煤拂」	季節「冬」
煤はきのここだけ許せ四畳半	明治28年	季語「煤拂」	季節「冬」
冬籠書齋の掃除無用なり	明治28年	季語「冬籠」	季節「冬」
音もせず親子二人の冬こもり	明治28年	季語「冬籠」	季節「冬」
春待つや只四五寸の梅の苗	明治28年	季語「春近」	季節「冬」

## 漱石が来る

足柄はさぞ寒かったでござんしょう	明治28年	季語「寒さ」	季節「冬」
梅活けて君待つ菴の大三十日	明治28年	季語「大三十日」	季節「冬」

## 子規の書簡

「小生は孤立すると同時にいよいよ自立の心つよくなれり 死はますます近きぬ

文学はやうやう佳境に入りぬ」 明治28年12月 五百木良三（瓢亭）宛書簡

## 子規の決意・病状・祝句

今年はと思ふことなきにしもあらず	明治29年	季語「元旦」	季節「新年」
のどかさや杖ついて庭を徘徊す	明治29年	季語「長閑」	季節「春」
鶯の鳴けども腰の立たぬなり	明治29年	季語「鶯」	季節「春」
蓊蓊たる桃の若葉や君娶る	明治29年	季語「若葉」	季節「夏」

※表記は、『子規全集』（講談社）による。